

ゼロ使へと転生！！

モグモグラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故で命を失ったオリ主が『ゼロの使い魔』の世界に転生して、自由生きる話です。

思いつきだけなので、原作と異なる場合もあります。

息抜きでやるので更新は牛の歩みよりも遅いです。

目次

| | |
|-------|---|
| 1 話 | 3 |
| プロローグ | 1 |

プロローグ

ごく普通に生まれ、極々平凡な生い立ちを辿ってきた僕は、ある日、死んだ。

月を見上げてたら、酒を飲みたくなって近くのコンビニにつまみと酒を買いに行った帰り、死んだ。夜空を見上げながら歩いていたら、飲酒運転の車両に撥ねられて地面を転がっていた。

道路に広がる赤い液体。身体が冷たくなっていくのを感じながら、近くに転がる缶ビールを見つめ、ぽつりと思った。

(ああ……。ビールが勿体ない。)

ビールの心配をしながら、僕は死んだ。

§

車に轢かれて死んだと思ったら、神様っぽい老人が目の前にいた。なにを言っているのかわから (ry

周りを見てみるとそこは川原。神様がいるにはふさわしくないよ
うな……。

「ええと……神様(仮)さん？」

「いや儂、正真正銘の神様！」

「それじゃあ、神様？ 僕に何の用ですか？」

「うむ。実は、本来お主はまだ死ぬべきではなかったのだが……。こちらの手違いで殺してしまったからの、そのお詫びに別の世界に転生させるように上司から言われてな。」

神様にも上司って居るんだ……。

「転生先はこっちで決めるとしての。お主に特典をやらなきやいかんのじゃ。」

「特典……ですか？」

「そうじゃ。まあそっちも勝手に決めたが。」

希望を聞かない!?

「だってめんどくさ……。ゲフンゲフン。後のお楽しみじゃ。」

今、めんどくさいって言おうとしたよね!?

「良いじゃろ。儂も報告書が溜まっとるんじやよ。」

「自分の都合!?!」しかも報告書って。

後、地味に心読んできてるよね?!

「神様じゃし。心ぐらい読むわい。さっさと報告書書きたいから、もう行かせるぞ?！」

「質問ぐらいは受けつけてくれませんか……」いきなり連れてこられて、はい転生だとか言われても、不安なんですけど。

「……むう。仕方ないのう。」

普通なら、質問を受け付けるべきだと思うのに、この神様()は……。

生前、滅多なことでは怒らなかつた自分だが、この時ばかりは、本気で目の前の神様に対して、殺意を感じた。しかし、殴ろうとかいう衝動を抑え込めたのは褒めて欲しいかもしれない。

「……転生後は自由にしていいんですよね?！」

「モチのロンじゃ。そっちは儂の管轄じゃないし、何しても儂は気にせんで。」

ああそうですか。

気のせいかな、この短時間で若干老けた気がする。

「他はないかの?！」

「……もういいですよ。早く送ってくださいよ。」

この人?に聞いても無駄そうだし、早く転生させてもらおう。

「ホイ。それじゃ、目を閉じてそこら辺にヨコになりなさい。」

言われた通りに横になる。うう。砂利が刺さって痛い。

しかし、そこら辺についてアバウトだよな。

1話

転生完了つと。

異世界の自分の肉体が十歳になった折に、意識と記憶が受肉した。代償として高熱を出して死にかけたけど。

一ヶ月近く寝込んで、元気になったので転生後の状況を確認する。まず、ここはハルケギニアという世界で、ここには人間、幻獣、亜人がいる。人間にも平民と貴族という階級が存在している。平民と貴族の大きな違いは何かと言うと、貴族は“魔法”という力が扱える。

何か引つかかるなあと思って記憶をひっくり返してみたら、学生時代に友人が熱心に進めてきた『ゼロの使い魔』そのモノだった。あれは好きだった。

……話がずれた。何の話だったか。この歳で物忘れが激しいとかちよつとマズイか。

『……何をやっておる?』

この声は神様か。何の用ですか?

『良いから、せっかく与えた特典の確認でもしておれ。ゼロ使設定など、原作で確認してくださいとでも言っておけば良いんじゃない。そもそも原作ブレイクする気じゃし。』

いや、誰に!?! 後原作ブレイクって!?!

『それと原作知識は消しとくぞ。』

えっ……ちよつ……

§

特典の確認をしよう。

一つ目? 反射能力。字の如く。

二つ目? 無限収納空間。ゲームに良くある、それどっから出したの? を形にする収納空間(容量無制限)

三つ目？肉体強化。肉体を強化する。神様曰く、ダンプと衝突しても逆にダンプを粉砕できるくらいに強靱だと。

結論？人の皮を被った怪物がここにいた。思うんだけど肉体強化あるなら反射はいらぬ気がする。貰えるものは貰うけど。

記憶に靄がかかった様な違和感はあるけど……まあいいや。

神様は報告書片付けるって、質問を受け付けずに帰っていった。ほんとあの人？は自由すぎる。

えーと、次は転生後の自分の立場か。今の自分は、リオン・フェデルタという貴族。トリステインでは珍しい銀髪持ちのパツと見が美少女な男だ。何でこんな容姿になったのか……orz

ちなみに一人称は俺だ。

まあ貴族とはいっても、領土も与えられてないけど。

メイジとしての魔法適性は、なんと四系統をほぼ満遍なく扱えた。両親が嬉しそうにはしゃいでた。実はこれも特典じゃね？

でも、複数の系統を足すのはあまり得意じゃなく、トライアングルだ。

……いや、トライアングルは充分すごいじゃん。んじや、これも特典なのか。サービス多すぎだな、あの神様。万年平なのに。

『誰が平じゃ!!』

どこかから声が聞こえた気がする。

ともかく（容姿以外は）文句ナシのチート性能である。

§

時はたち、五年後。俺はトリステイン魔法学院へ入学する。（結局5年間、体を鍛えたというのに美少女じみた容姿のままなのに、シヨックを受けた。むしろ更に美少女っぽくなった。どういうことなの……）

今生の別れでもないのに大泣きする両親を宥め、日用品は既に運び込まれてるので、大きめの鞆に詰め込んだ私物（別に収納空間に放り

込んでも良かったが手ぶらは怪しまれるし、)を持って馬車に乗り込む。

使用人たちに手を振り、姿が見えなくなったあたりで背もたれに体重を預ける。

「うまくやってけるかなあ?」

なるべく目立たずに過ごしたいけど……無理か。絶対容姿で人目を惹きかねない。

「……はああああ。」

大きいため息を漏らす。

§

トリスティン魔法学院。

様々な国の貴族たちが魔法を学ぶために通う学校の名前だ。

入学するのはどれも貴族や王族の子供と、よく言えば高貴な学校。

悪く言えば金持ちの溜まり場だ。

俺もその『金持ち』の一人だけだね。

入学式でのオスマンの話は、心底退屈だった。

勉強に励むようにとか、ありきたりなことだけを言っていた。周りの生徒も、あくびを噛み殺したりひそひそ話をしているやつらが多い。何名かの男子はこつちを何度もチラチラと見てきている。

暇つぶしに周りの生徒を見回していると、数名、目立つ髪色をした生徒

がいた。人のこと言えないけど。

「あら? あなた、女の子だと思ったら男の子だったの?」

後ろから声を掛けられ、振り向くと、赤い髪が特徴的なグラマーな女子生徒がいた。

「よく間違えられるが、男だ。それで「貴女は?」と聞こうとしたらそれより前に女子生徒は名乗った。」

「おっと、申し遅れましたわ。私、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストーと申しますの。」

「リオン・フェデルタだ。三年間よろしくお願いする。ミス・ツエルプストー。」

小声で名乗り返す。

「よろしく。リオンって呼んでいいかしら？」

「構いませんよ。ミス」

ツエルプストーと、いおうとした時、言葉に被せてくる。

「そんなかしこまった言い方はしないでいいわ。」

私のこと『キュルケ』って呼んでくれない？

リオン？」

耳元で脳に直接語りかけるような台詞に驚いた。普通の男なら、これでもう彼女の虜になるんだろう。それほどに彼女は女の武器を熟知している。

「よろしく。キュルケ。」

だが、直感的に彼女が熱しやすく冷めやすい性格だと気づき、スルーする。(本心的には、もう少し大人しめな子が好みだ。)

「んもう……冷たいのね。貴方。」

通用しないと分かったのか、残念そうに引き下がった後は話しかけてこなかった。

いつの間に話は終わっていて、自由時間になっていた。

早めに移動しよう。何故かというところ……

「ミス！ よろしければお話を！」

男共が一斉に向かってくるからだ。

教師や周りの生徒が目を丸くする中、椅子を足場にして逃げることにした。